津田梅子の生き方（14）　～ 梅子の闘病と死～【最終号】

アナ・ハーツホン
【提供】津田塾大学津田梅子資料室

梅子は 1917（大正 6）年の春ごろから体調を崩して入院します。2 か月後に退院したものの、その後も入院と退院を繰り返しました。3 度の入院を経て、これ以上塾長を務めることが難しいと自覚した梅子は、1919（大正 8）年の 1 月に社員会に辞意表明の手紙を寄せると、同年 2 月には辻マツが塾長代理に就任したことで、梅子は塾長としての実質的な活動を終えたのです。

その年の 10 月ごろ、親戚一同の計画で建てられた北品川御殿山（現：東京都品川御殿山の付近）の住居が完成したため、4 度目の入院を終えた梅子はここに移り住むと、それから以後 10 年間を過ごしました。

一方で、梅子が実質的に塾長を退いた後の女子英学塾は、1923（大正 12）年の関東大震災に伴う大火災によって、東京市中心部に位置する麹町区五番町の校舎が全焼してしまいます。梅子が目指していた女子大学の設立どころか、塾の存続すら危ぶまれる窮境に陥りました。

この危機に際して、梅子に代わってとある人物が奮起します。それは、既に 63 歳になっていたアナ・ハーツホンでした。アナは急遽アメリカに帰国すると、自ら先頭に立って募金活動を展開しました。数年間に渡るアナの献身的な努力により、塾は目標金額を超える 100 万円の資金を得ると、塾の復興と小平キャンパスの建設を果たしたのです。

梅子が晩年過ごした別荘があった場所　現在鎌倉市稲村ガ崎

1928（昭和 3）年、梅子は昭和天皇即位の大典に際して勲五等に叙され、瑞宝章を授けられました。また、翌年からは、さらに養生できるようにと鎌倉の別荘に移り住みます。しかし、梅子の病状は悪化の一途を辿りました。関東大震災から 6 年後の 1929（昭和 4）年 8 月 16 日、梅子は鎌倉の別荘で脳出血のために亡くなりました。享年 64 歳（満年齢）でした。梅子は、アナをはじめ多くの人々の支援によってできた小平キャンパスの完成を見ることが叶わずに、その生涯をとげました。

梅子の葬儀は、東京市麹町区五番町の女子英学塾講堂での校葬（キリスト教式）として行われると、会葬者は約 1 千人にも上り、昭和天皇と皇后からは祭祀金一封が下賜されました。

1931（昭和 6）年、女子英学塾は、東京府北多摩郡小平村(現在の東京都小平市)に移転しました。新しい校舎が完成したのです。本館はアナの功績を讃えて後年「ハーツホン・ホール」と名付けられました。梅子の墓所は敷地内に移されて、今も津田塾生を見守っています。

梅子の死去から 4 年が過ぎた 1933（昭和 8）年に、女子英学塾は梅子を記念して校名を「津田英学塾」に改めて新たなスタートをきりました。太平洋戦争の最中である 1943（昭和 18）年 1 月には「津田塾専門学校」と改称し、終戦後の 1948（昭和 23）年 3 月には「津田塾大学」となりました。現在に至るまで多くの優秀な卒業生を輩出している津田塾大学で、梅子の志は生き続けています。

※※※

さて、ここからは筆者（阿久津）が参加したシンポジウムのレポートを掲載させていただきます。

令和 6 年 4 月 26 日（土）、東京ウィメンズプラザホールにて「新札記念津田梅子シンポジウム～女性先駆者津田梅子の軌跡～」が開催されたため、聴講させていただきました。

津田塾大学学長　髙橋裕子様、一般財団法人新渡戸基金理事長　藤井茂様、一般社団法人日米協会副会長で山川捨松ひ孫の久野明子様、津田仙研究者津田仙ひ孫の津田道夫様がパネリストとして登壇し、貴重なお話をしてくださいました。

それぞれの道で活躍する見識の高い方々のお話が聴けることを大変有難く感じながら、私は中でもとりわけ津田塾大学学長の髙橋裕子様のお話に感銘を受けました。以降、髙橋学長のお話の一部を紹介させていただきます。

「21 世紀になった今でも連綿と続く津田塾大学の近代女子高等教育ですが、なぜこの事業をここまで継続できたのでしょうか。それは、ブリンマー大学留学時の梅子が、寄付母体をかため、8,000 ドルにも及ぶ次世代のための募金支援を集めて、日本人女性のための奨学金制度（「日本婦人米国奨学金」委員会）を築いたことにあります。日本で女性が高等教育を受けられなかった時代に、経済的・精神的に自立した女性を増やし、自分一人のことに留まらず、日本という国の発展につなげたいという強い想いが梅子にはありました。そんな梅子の熱意が生んだ奨学金制度が、津田塾大学及び日本の女子教育を導く多くの人材の育成を支え、現在まで続く女子高等教育の源泉となってきたのです。

また、1905（明治 38)年に大山巌伯爵邸で行われた女子英学塾同窓会におけるこんなエピソードがあります。

大山巌伯爵夫人である大山捨松は、女子英学塾で学んだ訳ではありませんが、盟友である梅子のために女子英学塾の同窓会長となりました。「大山巌侯爵夫人」が同窓会長になることで政財界の支援もより大きくなるとともに、捨松の人望により集まったバザーの収益も梅子を支えました。捨松自身は、女性のための学校をつくりたいという夢を抱いて帰国しましたが、大山巌の夫人となる道を選び、自らの手でその夢を果たすことはできませんでした。しかし、大山巌伯爵夫人として女子英学塾の同窓会長となることで梅子を支え、自らの夢を梅子に託したのです。そんな捨松と梅子のコラボレーションによって女子英学塾は誕生し、発展を続けていきました。また、音楽教師としてのキャリアと家庭生活の両立に励んでいた繁子も、梅子のことを人生の最後まで応援しました。岩倉使節団とともに最初の女子留学生として渡米した 3 人は、それぞれが違った生き方をしましたが、女子英学塾創設によって再び強く結びつき、若き日に夢見た日本の女性が高等教育を受ける時代を共に実現していったのでした。

さて、そうして立ち上げた女子英学塾ですが、ようやく軌道に乗り出し、これからという時期に、梅子は長く病に苦しみ、やがて亡くなっていきます。しかしそんな自らの人生を、梅子は手記の中で『一粒の麦』という聖書の言葉に重ねて表しています。

自分自身のことでいつまでもくよくよしてはいられない。

一粒の麦は地に落ちて死ななければならない。しかし、もし死んだなら、麦は豊かな実を結び、増えていく。

梅子はそう考えながら、自らの生涯を閉じました。そんな梅子の想いが実を結ぶかのように、女子英学塾に学び、梅子と同じくブリンマー大学に留学した、星野あい、藤田たき、赤松良子など、梅子の後継者達が津田塾大学をしっかりと支えて、今をもって日本のみならず世界で活躍する人物を輩出し続けているのです」

髙橋学長が仰っていたように、本校に勤務していた津田塾大学卒の英語科の教員や大学 OG の方々にお会いしても、英語はもちろんのこと、道徳心、芸術、自然科学への関心が高く、偏りのない優れた生き方をされていて、まさに梅子の信条である「all-round women」を実践されていることに驚くとともに、梅子の志が今なお確かに受け継がれていることを感じます。

これは、正に髙橋学長御自身が 40 年もの長きに渡り津田梅子について研究され、学長として梅子の意思をしっかりと引き継ぎながらも、時代にあった改革を行いながら経営をされていることの賜であろうと思います。学問に熱心に打ち込む志の高い学生の集う名門女子大学として現在も賞賛される津田塾大学が、道を切り拓く数多くの先駆者を輩出し、学びを社会に還元し続けていることを改めて感じる一日となりました。

最後になりますが、1 年 3 か月にわたる学校だより「津田梅子の生き方」の文章掲載にあたり、多大なる御指導・御協力をいただきました、津田塾大学津田梅子資料室の皆さまに記して感謝申しあげます。

津田塾大学本館 （ハーツホン・ホール）
【提供】津田塾大学津田梅子資料室